



わたしたちは **なぜ** うまれてきたの？

ぼく
僕のなぜ、
わたし
私のなぜ

じ ゆうくう かん
自遊空間ZERO
へん
編

わたしたちは **なぜ** うまれてきたの？



ぼく
僕のなぜ、
わたし
私のなぜ

じ ゆう くう かん
自遊空間ZERO
へん
編



だいしょう
第1章
なぜ?!

気がつけば、

そこは青一色の世界だった。

上も、下も、右も、左もない、

ただ透明感のある青い世界を、

ゆったりと光だけが漂っている。

「なんて自由なんだろう。」

「なんて気持ちがいいんだろう。」

カエデは、今まで、こんなにも自由で、

こんなにもさわやかな気持ちを

感じたことがなかった。

「このまま、ズーッと、ここにいたい。」

そう思ったのも
つかの間、自分が、
今、いったいどこ
にいるのか、どう
いう状態なのが、
気になりはじめた。
カエデは、自分の持つ、すべての感覚を澄ませて、
今の状況分析をはじめた。
ヒョツとして、ここは……？
いや、そんなハズはない!?
ためしに少しだけ、まわりの水をなめてみた。



やっぱり！！！！！！

ワタシ、およげない……！！

カエデを、パニックがおそった。

手足^{てあし}をバタつかせ、息^{いき}をとめて、必死^{ひっし}で水面^{すいめん}を^{めざ}目指そうとするが、すぐに息^{いき}があがってしまい、口^{くち}をパクパクさせる。

そのたびに、口^{くち}から、鼻^{はな}から、海水^{かいすい}がカエデの喉^{のど}へむかって押しよせてくる。

「ワタシ、このまま死^しぬんだ。」



フタ
およげな—い—!

そう思った瞬間、まわりからいっせいに笑い声がおこった。

「カエデーツ、なにやってんだーッ！」

あたらしいパフォーマンズのつもりか!？」

まわりを見まわすと、カエデを取りこかむように、

イルカたちの群れが集まってきていた。

「なんのつもりなんだか……ちつとも楽しくないよ。」

べつの一頭が、口にくわえた海藻を、投げるように吐きだした。

「カエデーツ、海藻サッカー、やろっぜ。」

カエデのからだだが、考える間もなく、しなやかにターンし、

そのくちばしに海藻をとらえた。

「ナイスキャッチ！カエデーツ、こっちへ投げろーッ！」



いつの間にか、カエデも、イルカになって

海藻サッカーを楽しんでいた。

「海藻サッカーも、あきちゃったよ。ほかにももしろい遊び、
ないのかなあ。」

「じゃあ、波のりはどう！」

「海は静かだし、大きな船も通らないし、無理だよ。」

「船がたてる波にのって、競争するの、最高なんだけどなあ。」

「たまには静かにパズルでもどう？」

「パズル……？」

カエデの提案に、みんなが耳をかたむけた。

「ナゼナゼ・パズル」

「カエデッ、それ、ナゾナゾのまちがいじゃないの?」

「ちがうの! みんなが、自分^{じぶん}の中^{なか}に眠^{ねむ}っている《ナゼ》を探^{さが}しだすの。

自分^{じぶん}は《ナゼ》生^いきているのか、とか、

《ナゼ》死^しぬのか……とか」

「どうして、こんなに泳^{およ}ぎがへたなのか

……とか」

「クルル、ちゃかさない

で、まじめに聞^ききな

よ。」

「ゴメン、

サカナ、探^{さが}

すんなら得意^{とくい}な

んだけどな。それに

お腹^{なか}もふくれるし……」

「お腹^{なか}はふくれないけど、なんか

タカラ探^{さが}してみたいで楽し^{たの}そう。」

「探^{さが}しだして、どうするんだよ？」

「カエデが、次の展開^{てんかい}を考^{かんが}える。

「エーツとつぎはね。つぎは、その中から、自分^{しぶん}にとって一番^{いちばん}

大事^{だいじ}な《ナゼ》を選^{えら}びだすの。」

ふね 船^{ふね}と競争^{きょうそう}するの、最高^{さいこう}！



「そうか、だれが一番いちばんすごい《ナゼ》を
掘ほりだすか、競争きょうそうだな。」

「ちがうよ、だって、そんな
のくらべられないじゃない。」

「そうだよ、形かたちない

んだから、大おおきい

とか、小ちいさいとか、

重おもいとか、軽かるいとか

……くらべよう、ないよネ」

「カエデーツ、じゃあ、どうすんだよ!？」

「つぎはネ、どうして自分じぶんが、

その《ナゼ》を選んだか、考えるてみるの。」

「ふーん、おもしろくなさそう。それに、まちがいなくお腹はふくれないけど……まあいいか、やってみるか。」

「やろうよ、やろうよ、きつと、おもしろいよ。」

イルカたちの声が小さくなり、イルカたちの姿も、青い海に吸いこまれるように、どんどん薄れていった。



朝^{あさ}6時^じ、目覚^めましをセッ^せトしたスマ^あートフ^おォンが鳴^なった。
静^{しず}かなアラーム音^{おん}なのだが、

テ^てーブルの上^{うへ}でブルブルふるえ、かなり騒^{そわ}々^{ぞう}しい。

いつもなら、この音^{おと}に目^めを覚^さまされ、かえで

の一日^{いちにち}がはじまるのだが、今朝^{けさ}

ばかりはちがっていた。

昨夜^{さくや}見た夢^{ゆめ}のせいだろうか、

早^{はや}くに目^めが覚^さめてしまい、眠^{ねむ}れぬままにウツウツとしていた。

その耳^{みみ}に、アラーム音^{おん}と振動音^{しんどうおん}の合奏^{がっそう}が鳴^なり響^{ひび}いた。

自分^{じぶん}の中^{なか}の《ナゼ》を掘^ほりおこすって——いったい何^{なん}なの？

ワタシが、どうしてそんなこと、しなきゃいけないわけ？



牧場の柵がこいに沿って、丘の頂
きへと登っていく道がある。
かえでのお気にいりの散歩道だ。朝
起きるなり、いつも通りに、この
道を歩きだしたものの、昨夜の夢
が気になって仕方がない。
忘れよう、打ち消そうとしても、い
つの間にか自問自答している。
「ワタシが、どうして？」
「アレッ、これも《ナゼ》のひとつ
か！」



「それに、こんなくだらない夢に、《ナゼ》ワタシは、こんなにもこだわっているんだろう?」

考えている尻から、またもや《ナゼ》が顔を出す。

「ダメだっ、《ナゼ》から逃げられない!」

「でも、ナゼ、ワタシはこの牧場にいるんだろう?」

朝の散歩を楽しもうと歩きだしたかえでだったが、《ナゼ》という思いにとらえられるや、またも海の深みへと沈みこんでいった。



ワタシは逃げだしてきたんだ。
学校^{がっこう}や、友だち^{とも}や、お母^{かあ}さんや、
お父^{とう}さんや、ワタシのことを知る、
みんなから逃げだしてきたんだ。
でも、なぜなんだろう……？

じゃあ、誰^{だれ}から話^{はな}す？

.....

カエデが、あつまったイルカたちの顔^{かお}を見^みわたすが、

だれからも声^{こえ}があがらない。

クルルなどは、バブルリングをつくって一人^{ひとり}で遊^{あそ}んでいる。

「言^いいだしたオマエからやればいいじゃん」

みんなの視線^{しせん}がカエデにあつまる。

「じゃあ……」と、カエデが声^{こえ}を上げよう

としたとき、となりにいたユズちゃんが、

右^{みぎ}の胸^{むな}びれをあげた。

「ワタシから話^{はな}すよ」



ワタシから
話^{はな}すよ！

ユズちゃんの「ナゼ」

小さいころ、一人になると、さびしくて

さびしくて、それに

呑みこまれてしまい

そうで怖かった。

これって、なんなの？

それに、学校がきらいなわけじゃないのに、なんだか疲れるし、「巻きこまれる！」って感じてしまうの。

これって、ナゼ？



三つ目はね、小さいころって、ワタシ、もっと純粋で素直だったと思うの。でも大きくなるにつれて、悩んだり苦しんだり……「愛」とか「憎しみ」とか、「うれしさ」とか「怒り」とか、そんな思い、

いったいどこから来るの？
いったい何なの？

まだあるわ、
ワタシ、犬や草木と、
話せそうな気がするの。

それって、気のせいなのかなあ？



最後、大人になるって、どういふことなの？

それって良いことなの、悪いことなの？

ユズの心の中に、自分を見守る、お父さんやお母さんの顔が
うかんだ。

それは、不思議なことに、イルカではなく、人間のお父さん
であり、お母さんだった。

「ユズ、おまえ、ずいぶんややこしいこと、考えてたんだなあ。
そんなことを考えてたら、オサカナ、まづくなっちゃうよ。」

「クルル、食べることから、ちよっと離れたらどう！」

サクラが、横あいから口をはさむ。

「オレだって、ちゃんと考えてるよ！」

クルルがムキになつて答える。

「じゃあ、次はクルルの番でことで……」

クルルくんの ♪ ナゼ ♪

ボク、思うんだ。外国へ行くと、言葉や風習がちがうだろう？

それって、どうしてなんだって。それに、ボクは、ナゼ、日

本人に生まれたんだろうって。

戦争は、なんのためにあるのも思うし、いのちを落とすつ

てどういうことなのかって考えてしまう。

人や動物は、何のために生まれ、何のために生きてるのかと



無限^{む げん}って何^{なん}だろう？

ひと どうぶつ
人^{なん}や動物^うは、
何^{なん}のために生ま^うれ、
何^{なん}のために生^いきてるの？

も思うし、気がつけば「無限って何だろう？ 宇宙は、どうして、何のために生まれたんだろう」って考えている自分がいる。

クルルは、生まれ育った大垣のまちを、

ひとりぽっちで歩きながら、

海の仲間たちに話しかけて

いる自分を想像していた。

そして思った。

「ボクがイルカさんの夢を見てるんだろうか？

イルカさんがボクの夢を見てるんだろうか？」



「クルルちゃんて、いつつも、食^たべることばかり考^{かんが}えてるんだと思^{おも}つたらすごいこと考^{かんが}えてたんだ！」

ユズが感^{かん}心^{しん}したように話^{はな}した。

ちよつと得意^{とくい}そうなクルルを見^みながら、

カエデは、「みんなすごいなあ」

と思^{おも}いながらも、

「イルカにも日^に本^{ほん}人^{じん}だとか、外^{がい}

国^{こく}語^ごとかあるのかなあ。これっ

て、やっぱり夢^{ゆめ}だよなあ」と、

どこかで感^{かん}じていた。



ハルちゃんの名前？



ナツちゃんとの十拍子

ハルちゃんのゝナゼ

ワタシは、「ナゼ、お父^{とう}さんは、お母^{かあ}さんにひどいことをしたのかなあ？」って思^{おも}うし、「ナゼ、みんな、競争^{きようそう}するのかなあ？」って思^{おも}う。みんな、よく「性格^{せいかく}がちがう」って言^いうけど、「性格^{せいかく}って何^{なに}？ ナゼ、みんな性格^{せいかく}が違^{ちが}うの？」それに、ストレス、ストレスってよく言^いうけど、「じゃあ、ストレスって何^{なに}？ どこからストレスってくるわけ。」

ハルちゃんの妹^{いもうと}、ナツちゃんが口^{くち}を開^{ひら}いた。

「ワタシも言^いうよ。」

ナツちゃんの「ナゼ」

「お母^{かあ}さんは、どうして、あんなお父^{とう}さんと結婚^{けっこん}したの？」

「どうして、うちはお金^{かね}持ちじゃないの？」

「どうして、お母^{かあ}さんはお化粧^{けしやう}するの？」

「どうして、お母^{かあ}さんは怒^{おこ}るの？」

「どうして、お母^{かあ}さんは保育士^{ほいくし}になったの？」

ナツちゃんの「ナゼ」をきいて、みんなが急に静^{しず}かになった。
なにか触^ふれてはいけない「タブー」に触^ふれたような気分^{きぶん}になっ



どうして、人間^{にんげん}って
こんなに心^{こころ}変わりが
激^{はげ}しいのか！

たのだ。

「サクラ、おまえ、まだまだよなあ」

クルルが、急にサクラに話をふった。

「ウン！」

サクラが、思い詰めたように話しはじめた。

この中では、一番の年長さんだ。

サクラちゃんのナゼ

ワタシがまず思うのは「ナゼ、人間は、手足が五本にわかれて
いるような、いびつな形をしているのか」ってこと。それ

に「どうして、人間にんげんってこんなに心こころ変わりが激はげしいのか」とも思おもってしまおう。

それに、「がんばることがよくない」とか言いう人ひとがいるけど、ワタシには「がんばっている人ひとは、輝かがやいて見みえるの。どうして？」それとね、「なぜ、人間にんげんはわからないことを解かい明めいしたがるの？」

これが最後さいご、「なぜ、人ひとは死しにたいと思おもうの？　そう思おもうことは、間ま違ちがいなのか？」

明あかるい話わだい題てんに転てんじようとしたクルルの思おも惑わくは失しつ敗ぱいに終おわった。サクラの大だいの仲なか良よしが、つい最さい近きん自じ殺さつしたことを、すっかり

忘れていたのだ。

サクラの「ナゼ」の中に、「ナゼ、人は死にたいと思うの？
そう思うことは間違いないの？」、その問いかけが、サクラの
悲しみを表していた。

それを聞いて、みんな、答えなど出ないのをわかっていなが
ら、それでも考えこんでしまう。

「ナゼ人は死にたいと思うのか？」

唐突に、明るい幼い声がひびいた。

「ワタシもやるネ」

最年少のマメちゃんだ。

マメちゃんのゝナゼ

ひとつめは、「どうして、勉強べんきょうしないといけないの？」

つぎ、ふたつめだよ、「食たべないと、どうして、死しぬの？」

クルルも言いってただけど、「どうして、国くにがあるの？」

よっつめは、「どうして、バカにされると悔くやしいの？」

最後さいごは、「どうして、友ともだちといると楽たのしいの？」

近ちかくの公こう園えんで、友ともだちとボあそール遊あそびをしてる自じ分ぶんのすがたが浮うかんできたが、その光景こうけいは、まるで海うみの中なかへ吸すいこまれるように、イルカたちと遊あそぶ自じ分ぶんにかさなっていた。

どうして、
バカにされると
悔しいの？



雰囲気ふんいきが少しすこしやわらいだところで、いよいよカエデの番ばんがやってきました。

「みんな、すごいなあ。小さな子こまで、しっかり自分じぶんと向むかいあっている。ワタシはどうかなあ。……そうか、ワタシも、ここでしっかり自分じぶんと向むかいあえたら、自分じぶんの世界せかいへ帰かえれる気がする。きっと、そうなんだ。今いま、この時間じかんこそが、ワタシに与あたえられた、自分じぶんと向むきあうチャンスなんだ。」

カエデの ♪ ナゼ ♪

ワタシのひとつめの「ナゼ」は、「どうして人ひとによって感かんじ

ワタシも、ここでしっかり
自分^{じぶん}と向^むかいあえたら……



方^{かた}や考^{かんが}え方^{かた}がちがうのか?」っていうこと。

ふたつめは、子^こどもの時^じ期^きって大^{たい}切^{せつ}な時^じ間^{かん}だっと思^{おも}うの。

「その大^{たい}切^{せつ}な時^じ期^きに、な^なぜ、同^{どう}世^せ代^{だい}で集^{あつ}めた学^{がく}校^{こう}に閉^とじこめ
てしま^{しま}うの?」

み^みつ^つめ^めは、「普^ふ通^{つう}ってな^なに?」ってこと。

よ^よつ^つめ^めね、「い^いじ^じめ^める子^こと、い^いじ^じめ^めら^られ^れない

子^こと、ど^どつ^つち^ちにもな^なら^らない子^こ、そ^その^のち^ちが^がい^いは?」

最^{さい}後^ごは「学^{がく}校^{こう}では、み^みん^んな一^{いっ}緒^{しょ}で仲^{なか}良^よくッ

て教^{おし}え^えら^られるの^のに、ど^どう^うして戦^{せん}争^{そう}はお^おき^きる

のか?」ってこと。



「さあ、みんなのゝなぜゝが出そろったわ。」

つぎは、それぞれ自分の出したゝなぜゝとにらつめっこして、
自分にとって、今一番大切なゝなぜゝをひとつ選びだすの。

選^{えら}びだせたら、また集^{あつ}まろう。」

クルルが口をはさむ。

「いつ集^{あつ}まんだよ、いま決^きめちゃおうよ。」

「決^きめなくても、また勝^{かっ}手に集^{あつ}まっちゃうっていうか、集^{あつ}め
られちゃうような氣^きがするんだけど……」

ユズが言^いうと、

「ワタシも、そんな氣^きがしてたの！」

サクラも、声^{こゑ}をあげた。

「それに、よく人間の子どもになった夢をみる。夢どころか、ワタシの『ナゼ』って……」

それを聞いていたカエデは思った。

（わたしたちって、人間の誰かさんの夢なのかなあ。）

だい しょう
第2章

ひと

たった一つ！

たいせつ

わたしの大切なナゼ



ユズちゃんの選んだ「ナゼ」

私は、ナゼ生まれてきたのか？

カエデが進行役をつとめる

ことになった。

「じゃあ、ユズちゃんからいくね。

ユズちゃんの選んだ、いちばん大事な「ナゼ」は……？」



私は、ナゼ生まれてきたのか——ってこと。

だって、これが一番根本的で大事な気がするから。

それを知って、もし目的とかがあるなら、それを果たしてか

ら死しななければ意味いがないと思おもうし、この疑問ぎもんを解ときあかす
ことができたら、これ以上いじょうの幸しあせはないと思おもったの。

宗教しゅうきやうとかを見てみいると、みんな色々いろいろ言いっていて、どれが本ほん当とう
なのかわからないし、第一だいいち、それを信しんじている人ひとが本ほん当とうに幸しあ
せなのかも分わからない。

自分じぶんでも、何なにが一いち番ばん大だい事じなのかって自分じぶんに問といかけたの。そ
うして出でてきたのが、私わたしは、ナゼ生うまれてきたのか——って
ことだったってわけ。

そう語かたりおえるや、ユズユズの心こころの中なかから、湧わきあがってくる思おも
いがあった。

今、私がすべきことは、学校の勉強だとかをしつかりとして、自分の今の環境を整えていくことなんだ。
そのうえで、自分の中から湧きあがってきた「ナゼ」を忘れないように、一生かけて自分に問いかけていく。

そうですね。あなたの中から湧いてきた「ナゼ」は、あなたの心でわかるというところにポイントがあります。
私は、なぜ生まれてきたのか——あなたの心でわかって、どうぞ幸せな人生を。

なに？ 今の、だれなの？

クルルくんの選んだ、ナゼッ

僕は、ナゼ日本に生まれてきたのか？

「最初の順番から行くと、次はクルルだね。

——クルル、考えてきたよね？」

ちゃんと考えてるよ。

僕の選んだのは、「ナゼ日本に生まれてきたか？」ってことさ。
だって、そうだろう、アメリカに生まれたって、オーストラ
リアだってよかったはずだろう。どうして、こんな難しい漢

字のある日本に生まれたのが、わからないんだ。

そうですね。アメリカ人だって、オーストラリア人だってよかったです。だけど、日本の国に生まれてきた訳はちゃんとあります。その訳は、あなたがこれから自分でしっかりと知っていかなければなりません。あなたは知っていただけるんです。今は、あなたが日本の国に生まれてきた訳はちゃんとあるということだけをお伝えしていただきます。

「だれ？ 今のなに!？」

ハルちゃんと、ナツちゃんの選んだッナゼッ
ナゼ、お父さんは、お母さんに
ひどいことをしたのか？

「次は、ハルちゃんとナツちゃん姉妹だね。どう、別々にやる？」

一緒にいいよ。どうせ一緒に考えたんだし……。
私はね、ナゼ、お父さんは、お母さんにひどいことをしたのか？
なぜ離婚したのかってこと。

そうだよ、私もおんなじだよ。どうして、お母さんは、あんなやつと結婚したんだろう？ってことだよ。

選んだ理由はね、お父さんとお母さんは、
いつもケンカばかりしていたからね。

ケンカばかり、いやだったよ。

ケンカするぐらいなら、結婚なんかしなきゃよかったって

思ったんだよ。



お父さんが、お母さんに、一方的にひどいことをしたの

ではないんです。

そういうふうにあなた方には見えなかもしれないけれど、お父さん、お母さんの心の中をのぞけば、どちらも同じくらい真つ暗です。真つ暗と言っても、今はまだ全然わからないと思うけれど、お父さんも、お母さんも、本当のことを知らないから、相手を責めたり、文句を言ったり、ときには暴力的になったりと、すぐにケンカをしてしまいます。それは、お父さんやお母さんだけではなくて、あなたたちも同じです。あなた方のお友だち、周りにいる人たち、みんな同じです。

みんなが本当にやさしくて、助けあって、穏やかな日々

を過すごせれば、それが一番いちばんいいのだけれど、なかなかそうはいかないんです。なぜでしょうか。

その「なぜ」こそが、あなたたちが、これから社会しゃかいへ巣すだつていくなかで、本当ほんとうに考かんえていくべきことだと私わたしは思おもいます。

「なに、今いまの……？」

「ハルちゃん、ナツちゃんにも聞きこえた？」

ユズが問といかけた。

「ウン、自分じぶんの中なかから聞きこえてくる感かんじだったよ。」

ハル、ナツの姉妹しまいが声こえをそろえた。

サクラちゃんの選んだナゼ

ナゼ、人は死にたいと思うの？

そう思うことは、間違いないの？

(エッ、私には何も聞えなかったよ。どうしてだろう?)

カエデは考えた。聞いていると、どうも、ひとつのナゼを選びだし、それを口に出したとたんに、自分の中から、思いが湧いてくるみたいだ。きっと自分も、発表したとたんにすごい答えが返ってくるにちがいない。

「カエデちゃん、次、私の番だね。」

サクラが遠慮がちに声をだした。

「あつ、ごめん。次、サクラちゃんね。じゃあ、お願いします。」

なぜ、私がたくさんある自分の疑問の中から「人はどうして死にたいと思うのか」、また「そう思うことは間違いないのか」を選んだのか。

それは、つい最近、親しかった友人が亡くなったことが一番の理由だと思っています。私は今までに、「死にたい」と思ったことや、「生まれてこなければよかったのに」と思ったこと

が何^{なん}度もあります。

人間^{にんげん}なら誰^{だれ}だって一^{いち}度はそう思^{おも}ったことがあるでしょう。亡^なくな^なった友人^{ゆうじん}も、同^{おな}じではないけれど、似^にたような気持^{きもち}ちだったのかもしれない。

いない人間^{にんげん}に聞^きくことはできませんが、それも仕方^{しかた}のないことですし、人間^{にんげん}が死^しにたいと思^{おも}うのも、人間^{にんげん}がそう思^{おも}ってしま^いう生きもののだから、仕方^{しかた}のないことなのかもしれない。つまり、私^{わたし}が言^いいたいのは、人間^{にんげん}は、生^いきているかぎり「死^しにたい」と思^{おも}ってしま^いう生きもので、そう思^{おも}うことは当^あたり前^{まえ}だから間違^{まちが}いではないということなのです。

「死^しにたいと思^{おも}うことは間違^{まちが}いだ」と抑^{おさ}えつけてしま^いうこと

は、そう思っている人たちをもっとつらくさせて、さらに「死にたい」と思わせてしまうことにつながるのではないのでしょうか。

でも、以上は私の考えであって「正解」ではないので、まだまだ疑問のままなのです。

この世には人の数だけ考え方があります。

だから、もしかしたら

「正解」は存在しないの

かもしれません。

どんなことに対しても、ただ、多くの

人が信じている、イコール正解と言うだけで……。



この世には人の数だけ考えがある。それはそうだと思
います。そして、そのたくさんある考えの中には、本当の
意味の正解はありません。その考えの中に、あなたが日
頃考えていること、思っていることが、すつぽりと収まっ
ているのです。つまり、あなたがすつぽりと収まってい
るということになります。

だから、その中で、いろいろあなたが思いわずらっても、
あなたが納得する「これだっ」という回答は引きだせま
せん。引きだせないはずです。

ではどうすればいいのでしょうか。

ひとつヒントです。

これから何かの^{なに}おりに、死にたいという^{おも}思いが^で出てきたとき、^う生まれてこなければよかったという^{おも}思いが^で出てきたとき、そこで止めるのではなくて、もう少し^{すこ}踏みこんで、なぜそんな^{おも}思いが^で出てくるのかと、あなたは、あなた自身^{じしん}に^き聞いてみてください。

あんなことを^い言われたから、されたから、^{けっ}決してそうではないと、何か^{なに}があなたの心^{こころ}の中から「^{おも}思い」として^で出てくれば、それでいいのです。

マメちゃんの選んだナゼ

どうして、友だちといると楽しいの？

ウン、私はね、やっぱり、どうして、友だちといると楽しいの？だよ。

だって、友だちと会うだけでも楽しいし、夜までだって遊んでいた。兄弟だったらいいのについて思ってしまう。一人しかいなかったら、つまらないけれど、友だちといったら何でも話せるし、遊べるし、ケンカしたって、どうにかなるから。おしゃべりしたり、お菓子の分けあいが一番楽しい。

大人にはあまりなりたくないよ。友だちと遊んでいる時間だ

けが楽しい。友だちと遊んだとき、ドキドキしたり、ワクワクしたり、時間がたつのが早く感じられてイヤ。友だちと遊んだり、友だちとお菓子食べたり、楽しい時間が減るからいや。

いつまでもお友達と楽しい時間が過ごせるというのは、仲の良いお友達がいるからですね。

そんなドキドキした思いや、ワクワクした思いを大切にしてください。

大人になりたくない、今は思っているかもしれないけれど、大人になったら、もっ



いいことがあるかもしれないよ。お父^{とう}さんに、お母^{かあ}さんに聞いてごらん。

本当^{ほんとう}は、お父^{とう}さんとお母^{かあ}さんが、あなたの一番^{いちばん}良^よいお友^{とも}達^{たち}かもしれませんよ。何^{なに}もなくてもいいじゃない。親^{おや}子^こ三人^{さんにん}仲^{なか}良^よく、本^{ほん}当^{とう}に仲^{なか}良^よく、楽^{たの}しく、毎^{まい}日^{にち}を過^すごせれば

……。

もう少^{すこ}しあな^おた^おが太^おき^おくな^おったとき、そんなことをあな^おた^おから、お父^{とう}さんやお母^{かあ}さん^{かあ}に提^{てい}案^{あん}してみ^みてくだ^{くだ}さい。

「カエデ、あとはおまえだけだぞ。」

クルルがカエデに声^{こゑ}をかけた。

カエデの選んだナゼ

普通ってなに？

「普通ってなに？」

そう思いだしたのは、海へきて、イルカさんの仲間になって
少しした頃です。

人間だった頃、私は形のない「普通」に追われていました。
目だちすぎると反感を抱かせ、目だたなすぎると「暗い」
「地味だ」とイジメられやすくなってしまいました。自分が普
通からはみだしてないか、いつも不安で、周りを気にして
ビクビクしていました。結果、普通にはなれていなかったら

しく、「ネクラ」と言われましたが……。

学校に行かなくなつて、なおさら普通じゃない自分がいやになりました。

海でイルカさんたちと暮らすようになって、みんなが本当にそれぞれで衝撃を受けました。みんなバラバラだし、休みたい日は休み、好きなことができます。周りに合わせようがないし、普通がまったく見えない場所なので、来たばかりの頃は何をしていいかわかりませんでした。慣れてくると「それでいいんだ!」と思えるようになって毎日が楽しくなりました。

あるはずのない正解を探して、つらい思いをしていた生

活^{かつ}から、普通^{ふつう}なんて気^きにせず、自分^{じぶん}のしたいことができる生^{せい}活^{かつ}になりました。それによつて悩^{なや}むこともあるけれど、「自分^{じぶん}で選^{えら}んだことだから」と、真正面^{まじょうめん}から立ち向^{たむ}かうことができます。

こんな生活^{せいかつ}になったからこそ、なおさら「普通^{ふつう}ってなに？」という気持^{きもち}ちが強^{つよ}くなってきました。

必死^{ひっし}で追^おいかけてきた、普通^{ふつう}の正体^{しょうたい}が知^しりたいのです。

「普通^{ふつう}って何^{なに}なんでしょう！」

カエデちゃん、何^{なに}か聞^きこえた？

「……ウウン、何^{なん}にも聞^きこえない。」

カエデが期待^{きたい}していた答^{こた}えは、何^{なん}にも返^{かえ}って
きませんでした。

沈黙^{ちんもく}に耐^たえかねて、

カエデは水面^{すいめん}を目^め

指^さし、思^{おも}いっきり

ジャンプしました。

水^{みず}しぶきと

一^{いっしょ}緒^{しょ}になって、

カエデの目^めから、涙^{なみだ}がひとつぶ、こぼれおちました。



ものがたりが終わって

目覚めたのは病院の一室だった。

そこは、先ほどの透明感のある真っ青な世界とはちがう、
真っ白な世界だった。

窓から入りこむ朝のまぶしげな光が、普段はもつとくすんで
いるだろう白い病室を輝かせていた。

おきあがろうとしたかえでは、腕に小さな痛みを感じた。

左腕に注射針が固定されていた。

「目を覚まされました。」

耳もとで看護婦の声がひびき、見わたすと、ぼんやりと、父と母の心配げな顔が浮かびあがってきた。

かえでは、いつからか中学校へ行かなくなった。というより、行けなくなった。というのが本当のところだ。

みんなが自分のことをどう思っているのか、そう思うと学校へ行くのが不安でしかたなくなってきた。

勉強は嫌いではない。むしろ好きなほう。本の虫で、教科書にしる参考書にしる、新しい知識、新しい世界にみちびいてくれる本の世界が、かえでは学校だった。

そんなわけで学校に行かなくても、成績は、学年で常に十番

以内に^い入^{はい}っていた。

お母^{かあ}さんからも、進^{しん}学^{がく}のことを言^いわれると、学^が校^{っこう}へ行^いかないことも不^ふ安^{あん}の種^{たね}になり、試^し験^{けん}の時^{とき}だけは学^が校^{っこう}へ行^いった。

それがまた、みんなから白^{しろ}い目^めで見^みられる原因^{げんいん}になった。

「あの子^こ、普^ふ通^{つう}じゃないのよ」

「みんなのことバカにしてるのよ」

「ちよつと成^{せい}績^{せき}がいいからつて、私^{わたくし}たちのこと無^む視^ししている」

「試^し験^{けん}の時^{とき}だけ出^でてきて、格^か好^{こう}つけすぎよ」

「私^{わたし}たち、頭^{あたま}が悪^{わる}いって言^いわれてるみたいじゃない！」

「みんなと一^{いっ}緒^{しょ}にやれないネクラ少^{しょう}女^{じょ}よ！」

みんなの思^{おも}いが聞^きこえてくるようで、気^きになりだすと、ます

まず学校へ行けなくなった。

でも家にいると、母とぶつかることが多くなった。

いい子であろうと必死になったが、それがまた苦しくて、だれにも迷惑にならずにいたい。いっそ死んでしまおうと思い、自殺も考えたが、父や母を悲しませるし……

あれやこれや考えるうち、ご飯が食べられなくなった。

食事がとれない状態が続くと、不思議に頭がさえきって、なんでも見通せるような感覚になってくる。

そんななか、自分を知る人が誰もいない世界に身を置きたいと思うようになり、インターネットで「不登校の中学生でも入れるような住みこみの施設」を探すようになった。

記憶はそこまでだ。

かえでは摂食障害でたおれ、救急車で病院へ運ばれた。

かえでは思った。

イルカさんの体験は、私の空想が生みだした世界なんだろうか？)

かえでの胸奥からひとつの思いが湧きあがってきた。

かえでさん、あなたには答えを出さないほうがいいと思います。
答えが出ないままに、それぞれ、これからす

るべきこと、したいことを見つけて、その中で自分のテーマとして持ち続けていけばいいと思います。

ひとつヒントです。

「普通^{ふつう}ってなに」「その正体^{しょうたい}が知りたい」という、あなたの中^{なか}に、「特別^{とくべつ}になりたい」という思い^{おも}、「特別^{とくべつ}を目指す^{めざす}」思い^{おも}はないでしょうか？

あとがきにかえて

お父さん、お母さんのゝなぜ

最後は、あなたたちのお父さんやお母さんが、子供の頃に感じたいくつかのゝなぜを紹介しておきます。お父さんやお母さんが、その疑問を思い起こし、おとなになった今、そのゝなぜにどんな答えを出しているのかも紹介し、このお話を終えることにいたします。

まずは、お父さん、お母さんが小さかった頃、どんなことを疑問に思っていたか？

◎私はわたし小学校の5年生しょうがっこう ねんせいくらいまで大變敏感たいへんびんかんでいろんなものが見えたり聞きこえたりしました。

そんな中なかで「人間にんげんは死しんだらどうなるのだろうか」といつも考かんがえ、夜よるも眠ねむれないくらいでした。

ある時ときお母さんかあに、この質問しつもんをしたら「わからないのでお父さんとうさんに聞きいてごらん。」と言いわれました。

父ちちに「死しんだら、すべて終おわりや、無むの世界せかいや。」と言いわれ、すごくシヨックをうけました。

◎どうして僕ぼくは、大勢おおぜいの人前ひとまえに出ると、こんなに怖こわくて不安ふあんで震ふるえて泣なきそうになるんだろう？

◎子供の頃の疑問「どうしたら幸せになれるの？」ということについて、ずっと考えてきました。

◎物心ついた頃からなぜか「悲しい」「寂しい」「死にたい」と思っていました。自分がこんなふうに思うのは、自分の生まれた土地、家庭環境のせいだと思っていました。だから私は遠くへ行きたかった。一人で自由に生きたかった。

◎自分が死んだ後どうなるのか？ 死んでから地獄へ行くのは嫌だから、いい人になろうと思っていました。

◎小さい頃、「何か間違っている、このまま毎日を何となく過ごしていいのだろうか」と思っていました。それは、どうしてな

のだろうか。

◎なぜ、こんな喧嘩ばかりする両親のもとに生まれてきたのか？

◎いじめられたら、どうしたらいい？

◎何をしても、どこかつまらないと心から喜べないのは、なぜか？

◎なぜ、お母さんの手をにぎると安心するのだろうか。

◎なぜ、このお母さんから生まれてきたのか？

◎私には本当の友達がいません。本当の友達って何ですか？

本当の友達ほんとうのともだちっているんですか？　できるんですか？
本当の友達ほんとうのともだち、いてほしいし、できてほしいです。

◎　こんなにもお利口りこうにしているのに、お母さんかあは、なぜ僕をよく怒おこるんだろう？　僕は小さい頃こころから、しょっちゅうお母さんかあに怒おこられました。気がついたら、怒り狂いかぐるっているお母さんかあがいました。いつも、「お母さんかあはなぜ僕を怒おこるんだろう？　こんなにもよく言うことをきき、こんなにもいつもお利口りこうにしているのに。」僕はさっぱりわかりませんでした。

◎　小さい頃から苦手にがてなものが多かった。高いところ、速いもの、暗い場所くら、狭い場所せま、尖とんがったもの……、呼吸困難こそきふこんなんになるくらい怖こわかった。尖とんがったものを見たら目が痛いたくなる。高いと

ころに行く^いとめまいがして狂^{くる}いそうになる。何^{なん}でこんなに嫌^{きら}いなのか、苦^{にが}手^てなのかわからない。

◎幸^{しあ}せ^わってどこにあるの？ どうして寂^{さび}しいの？

◎子^こ供^{ども}の頃^{ころ}、図^ず鑑^{かん}で宇^う宙^{ちゅう}の写^{しゃ}真^{しん}を^み見るのが好^すきだった。星^{ほし}や宇^う宙^{ちゅう}の写^{しゃ}真^{しん}を^み見て、宇^う宙^{ちゅう}の果^はてを^{おも}うと、気^きが遠^とく^{とお}なりそうだった。

◎親^{おや}には、お箸^{はし}の持^もち方^{かた}やあいさつ、マナーを教^{おし}えられてきたけれど心^{こころ}の中^{なか}は、教^{おし}えられなくても考^{かん}えたり、思^{おも}ったりする自^じ分^{ぶん}ってなんだろう。

◎なんで生^うまれてきたんだろう。

いっぱいいろんな人ひとがいて、毎日まいにち生まれてくる人ひともいれば死しんでいく人ひともいる。その中なかで「自分じぶんはどうして、なんのためにいるのかな」とよく考かんえていた。自分じぶんが死しんだらどうなるんだろ
う、いなくなっても世界せかいは何なにごとくもなかったように過すぎていく
んだろ。うな。そしたら、なんのために私わたしは生まれてきたんだろ
う。考かんえてもわからなかったし、お母かあさんに訊きいてもすすきり
とした答こたえはもらえなかった。だんだんその疑問ぎもんも自分じぶんの中なかで
薄うすれていった。

いろんな「なぜ」がででてきましたが、どれひとつをとって
も答こたえの出でそうなものはありません。中なかでも「自分じぶんはなぜ生う

まれてきたんだろう」という、とっても大切で、とっても難しく、でも、みんなに共通している「なぜ」。これについて、あるお母さんが、次のようなことを述べておられます。

今の自分から子どもの時の自分に言ってあげられることは、生まれてきた意味はちゃんとあったよということ。はつきりとした答えがあったよ。自分を見つめることを一生懸命やっていたけば、自分が答えてくれることを知ったよ。

目に見える世界の中で、自分という存在を見つけようとするのではなくて、自分の思いをしっかりと見つめていけば、本当の自分が見えてきて、自分はどれだけ喜びで幸せな存在

だったか心で感じる事ができて、どんどん自分の中の自分に出会っていききたいと思って、もともと自分の中にやさしさがあることが信じられるようになっていくよ。自分が自分を信じていけるなんて、こんな幸せなことはないなって思えるようになったよ。

いろんな思いを出して、悩んだり、苦しんだり、そんな自分も全部全部必要だったと伝えたいし、苦しいのはイヤだ、そんな拒否する思いも、全部全部ひとつのなかに吸収されていく「心の世界」があるんだよ。

だから、みんな、ありがとうだよ。生まれてこれでよかったね。お母さんに生んでもらってよかったね。そう思える自

分^{ぶん}が
い
る
ん
だ
よ。

今^{いま}の自^じ分^{ぶん}から子^こどもの時^{とき}の自^じ分^{ぶん}に伝^{つた}え
るというチヤンスを
もらって、こ
ういうのも良^いい
なと思^{おも}いま
した。純^{じゅん}粹^{すい}に不^ふ思^し
議^ぎに思^{おも}つ
ていた疑^ぎ問^{もん}に答^{こた}え
られ
るんだ
ってう
れしく
なりま
した。

子^こどもの頃^{ころ}の素^す直^{なお}な心^{こころ}を思^{おも}いだ
して、ま
たこれ
から自^じ分^{ぶん}の
心^{こころ}をま
っすぐ
見^みつめ
る時^じ間^{かん}を大^{たい}切^{せつ}に過^す
ごし
てい
こう
と思^{おも}え
ま
した。

あ
り
が
と
う
ご
ざ
い
ま
し
た。

编者「自遊空間ゼロ」

「自遊空間ゼロっていったい何をめざしているの？」って、よく聞かれます。

そう言われると、ハタとこまってしまう自分がいます。

この空間を企画した人間（私のことです）が、横着というか、ズボラというか、ほとんど何も考えていないのです。何も考えず、とりあえず自由に、何もしないでも許される空間がつくりたかった。まあ、こうとでも言うておけば、「何とかカッコつく」かもしれません。しかし形ができてしまうと、形のほうがいいろいろ考え出すのでしょうか、ここでボーッとすると、こうすれば、ああすればと、いろんな考えが浮かんできます。

それによると、子供たちがいろんなものと出会える場所にしたい。遊びと出会い、世界と出会い、動物と出会い、物語と出会い、何より自分と出会う場所。ゼロさんという空間は、そんなことを考えているようです。では、何をすれば？ 何をするべきか？ これについては答えられません。

みなさんの中でヒマな方がおられたら、ぜひ遊びにきて一緒に考えてください。ただし貧乏なもので、時間と空間は提供できるのですが、お金は提供できません。アクセスはホームページに紹介していますが、あまり便利な場所ではありません。

〒 635-0823 奈良県北葛城郡広陵町三吉 345-14

tel 0745-54-1218 / fax 0745-55-8440

<http://www.free-space-zero.com>

僕のナゼ、私のナゼ —わたしたちは なぜ 生まれてきたの？—

2017年5月5日 初版発行

編集したのは——自遊空間ゼロ

“ナゼ”の発信者は——北海道、岐阜県、大阪府の子供たち

答えてくれたのは——塩川香世さん

絵を描いてくれたのは——大槻ゆりさん・藤岡佳代さん

装丁してくれたのは——仁井谷伴子さん

発行者は——桐生敏明

発行所は——編集工房 DEP です

奈良県北葛城郡広陵町三吉 345-14

印刷・製本は——株式会社モリモト印刷

※この本を制作するにあたっては、全国のお父さん、お母さんにご協力いただきました。